

平成26年度事業にかかる目標設定とアウトカム（成果）について（27年3月末確定）（〔 〕は25年度目標数又は25年度末実績）

		情報発信	コミュニティ形成・連結	プロジェクト創出	プロジェクトのショーケース
アウトプット（事業量）	目標・事業計画	情報発信 100件 [100]	① イノベーション人材のコミュニティ形成 88回 [88] 学生、VC、起業家、支援機関、企業対象としたイノベーション人材のコミュニティ形成のためのセミナー等 ② 海外ワークショップ（学生、起業家） 2回 [2]	① ニーズ顕在化プログラム 20回 [20] ② ハッカソン（ものアプリ、ソフト系） 6回 [6] ③ 公開型イベント（オープンイノベーションマッチング、投資家・起業家マッチング） 6回 [6] ④ 非公開型イベント（事業開発研究会） 12回 [12]	● 国際イノベーション会議開催 参加者：400人以上 [200] ● プロジェクトのプロモーション機会創出 国際会議 1回 [1]
	実績	● イベント告知 日本語 178本、英語 30本 ● イベントレポート 日本語 3本 ● 起業家紹介等 日本語 80本 ● FB投稿 日本語 328本、英語 42本 ● メルマガ 24本、DM 81本 ● プレスリリース 5件 計 736 [736]	① イノベーション人材のコミュニティ形成 121回 [141] ② 平成27年2月16～2月20日開催 32人 [35人]	① 21回（LLP等） [21] ② 22回（ものアプリハッカソン等） [8] ③ 10回（イノベーションエクスチェンジ、ピッチイベント等） [6] ④ 13回（メンタリングサポート等） [12]	日時：平成27年2月10日（火）午後1時～午後7時15分 場所：グランフロント大阪コングレコンベンションセンター テーマ：地域イノベーションの育成と発展 (1) 基調講演：ダン・バートン氏（Techstars NY） (2) パネルディスカッション：ダン・バートン氏、ハネス・グレー氏（Spotify 日本代表）、堀江愛利氏（SVウィメンズスタートアップラボ代表）、ティム・ロメロ氏（元 株式会社 Engine Yard 代表）、カイリー・ン氏（500startups 東南アジア担当）他 (3) インターナショナルピッチコンテスト 10チーム（うち国外から5チーム） サブ会場にて、ベンチャー企業のプロモーションの場、VC、メディアとの出会いの場を提供
		イベント参加者数 3,800人以上 [3,800]		イベント参加者数 9,716人 [8,293]（別途、拠点来場者数 3,671人 [3,352]） ※合計 13,387人 [11,645]	
アウトカム（成果）	目標・達成水準	国内外のメディアに取り上げられる 定量的指標（開設からの累計） ① HPのユーザー数 100,000 [100,000] ② FBの「いいね」数 3,000 [2,000] ③ メルマガ登録者数 5,000 [3,000] 定性的指標 ● メディア掲載数及びメディアによる評価	起業・イノベーション創出を担う人材を輩出する多様なコミュニティの活動が活性化している 定量的指標 ① メンバーシップ（Osaka Hackers Club）登録者数 400 [200] ② Osaka Hackers Club 会員（プレイヤー・パートナー）が持つ情報発信対象者数 6,000 [3,000] 定性的指標 ● コミュニティの形成が促進されている ● 多様なコミュニティが参画している ● グローバルネットワークが形成されている	イノベーション創出に資するプロジェクトが具体化している 定量的指標 ① 事業化プロジェクト創出支援件数 30件 [20] （事業化定義） ● 守秘義務、共同研究等契約関係、ソフトウェア等における試作版の公開、資金調達に向けた具体的アクション ● スーパープロデューサーが認定したもの	国内外から注目度が高いプロジェクト発表の場として、国際イノベーション会議が評価される 定量的指標 ① 海外関係からの参加者数 100人程度 [100] ② メディアでの掲載数 前回カンファレンスにおける実績（10件）以上 定性的指標 ● メディアによる評価内容 ● YouTube、Facebook の情報発信効果
	目標設定の考え方	平成25年度の実績を勘案して設定している	平成25年度の実績を勘案して設定している	25年～27年度の3ケ年で、プロジェクト創出支援100件を目標としており、1年目は20件、2年目は30件としている	時機にあったテーマ設定や効果的な情報発信を行うことで、少なくとも昨年度並みの成果を設定している
	実績	定量的指標（開設からの累計） ① 118,436 [67,527] ② 3,447 [2,125] ③ 7,393 [3,977] 定性的指標 ● WEBメディア掲載 27回 [18] ● 新聞掲載 14回 [22] ● テレビ放映 12回 [2]	定量的指標 ① 446人（プレイヤー 328人、パートナー 118人） [268] ② 9,076人 [6,487] 定性的指標 関係先とネットワーク構築 ● Osaka Hackers Club 会員制度を構築しながら、企業、支援機関、大学、VC等イノベーション創出に関わるネットワークの層ができてきている ● 香港貿易発展局、香港サイエンステクノロジーパーク、仏大使館、ジェトロのネットワークによるセミナー、マッチング会等グローバルアクセスポイントの形成に努めている	定量的指標 ビジネスプランコンテストや、プログラムでの成果発表等を通じて形成されたチームの状況の把握に努めている。 ① 40件 [22件]	定量的指標 ① 参加者数 515人（うち外国人 99人 19.2%） [69人/307人] ② 8件 [9件] 定性的指標 ・Ustream 視聴者数 245件 [2,106] ・Facebook ページ 投稿 106件 [76]、 いいね 499件 [369] 他

評価：S 目標・達成水準を上回っており、特筆すべき進捗状況にある
 A 目標・達成水準に到達しており、順調に進捗している
 B 目標・達成水準の到達に向けて、おおむね進捗している
 C 目標・達成水準の到達のために、重大な改善事項がある

自己評価	段階別評価	A	B	B	A
	自己評価各事項別コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトプット、アウトカムともに目標達成した。 ・大阪イノベーションハブ(以下、「OIH」。)にブランディングを統一し、ホームページの訴求力を高めるべくフラットデザインにリニューアル。 ・Facebook ではイベントがリアルタイムで投稿され、日々の活動内容を発信する重要なツールに育った。 ・メールマガジンでも着実にイベント参加者の登録数が増加している。外国人のメルマガ会員数は100人程度。その拡充とコンテンツの充実が課題。 ・WEBメディアに取材される機会が増加している。全国、世界に発信する上では有効な媒体であることから、積極的に情報発信をしていきたい。 ・放送局との共催によるハッカソンの開催により、イベントそのものが独立した番組となる予定。ハッカソンの認知度がさらに高まることが期待される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトプット、アウトカムともに目標達成したが、集まった人材を結合させ新事業の創出につなげる状況としては十分とはいえない。 ・外部団体との共催イベントの誘致が成功しており、実施回数は目標数を超え、イベント参加者は目標を大きく上回る2倍以上に達し、拠点の認知度アップにつながっている。今後は、イベントの事業への貢献度を見極め、効率的な施設運営に努める必要があると考えている。 ・海外ワークショップは昨年とほぼ同様の参加人数で実施。 ・コミュニティ形成促進のためのメンバーシップ(Osaka Hackers Club)は、今年度にカテゴリーを、4分類から2分類(プレイヤー、パートナー)に変更し、新事業創出に取り組む個人とそれに関わる企業、組織という整理を行った。会員数は昨年度末から順調に増加し、今年度の目標を達成。多数のイベント開催を実現することで起業人材や支援者が出会える機会を提供できた。 ・英・米・加・デンマークの領事館関係、香港貿易発展局等政府関係、シンガポールの創業支援団体との事業共催実績に加え、ドイツ領事館やフランス大使館、またジェトロとも協力して事業を行うことで、海外展開の足掛かりも拡大している。 ・コミュニティ同士の交流の促進やイベント参加者へのフォローにより、プロジェクト創出につなげていくことが課題となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトプット、アウトカムともに目標達成したが、ハッカソンなどから、事業化にまで至る事例は少ない。 ・ハッカソンは、オープンイノベーションを志向する放送・通信分野の大企業との共催や、オープンデータへの注目の高まりにより、ITを利用した社会課題解決の動きなどを受け、実施回数が大幅に増えた。今後は、ハッカソンで出たアイデアの事業化や、チームの組成・フォローが課題である。 ・オープンイノベーションマッチングはサンスター、Yahoo と実施し、これまで築いた中小企業のネットワークをもとに多数の企業が参加し、数多くの提案を集めた。 ・吉本興業とコラボした「つつこまれピッチ」は初めて東京でも実施。注目を集めた。 ・メンタリングサポートは、VCや弁護士などの複数の専門家により、事業準備中のスタートアップの活動を支援した。 ・ロボット(Pepper)のプログラミング研究会やエネルギー関連技術の研究会を行った。 ・新たな取り組みとして、グローバル展開を促進させるため、在関西の外国人エンジニアらが参加する観光関連アプリを開発するハッカソンを実施。 ・こうした新たな取り組みを実施しながら、本事業によりゼロからプロジェクトを生み出す事例を増やしていく必要があり、ハッカソンなどで生まれたアイデアをライブラリ化し他者と共有する仕組みや、起業人材へのサポート機能の強化が課題と考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトプット、アウトカムともに目標達成した。 ・シリコンバレーのコピーではない地域の特色を活かしたイノベーションエコシステムの構築について世界各地から登壇者を招聘し議論した。 ・会議は全て英語で実施した。 ・来場者数及び外国人数ともに前回は上回ったが、ユーストリームでの視聴は振るわなかった。(ユーストリームについては、前回は会議終了後も録画を視聴できたが、今回は録画視聴ができなかったことなどが原因と分析。) ・今回、OIHが支援している起業家のために、展示スペースやVC、メディアとの出会いの場を設け、多数の来場者を得ることができた。 ・新聞・メディア等により複数回、またWEBメディアにより海外にも発信された。掲載数は前回は下回ったが、報道番組の1コーナーで取り上げられるなど、本市の取り組みについて一定のPR効果はあったと考えている。
来年度の方針		<ul style="list-style-type: none"> ・国内向けにはイベント告知に加え起業家とそのプロジェクトの発信を充実させ、起業家の成長を支援する。 ・また、海外からのアクセスと認知度向上に向け、テクノロジー系のWEBメディアとの連携強化など新たな取り組みにより情報発信力の強化に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さらなるプレイヤーの集積を行うとともに、プレイヤーやその他ステークホルダー達との連携等を促進させる。 ・よりグローバルな展開をめざせるイベントの実施に注力するとともに、蓄積されつつあるグローバルアクセスポイントを活かして成功事例を生み出すため、関係機関との連携を強化させていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・3年間の最終年度として、プロジェクト創出を加速させるために、外部の支援プログラムとも連携するなど必要な支援者へつなげる継続的なサポートやフォローに意識して取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際会場は今年度構築したスタイルを踏襲しつつ、WEBメディアでの発信力強化を行い、さらなる世界的認知の獲得をめざす。
評議会評価	段階別評価	A	A	B	A
	事業総括コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・この2年間で、OIHを活用するパートナーが増えて、活用方法も多様化している。結果としてOIHの認知度が飛躍的に高まっている。大手企業の活用も増えてきた。全体的には、大変良くやっているのでA評価。今後は、OIHからターゲットを決めて積極的にアプローチをすることで、大手を巻き込んだ連携推進を期待する。 ・「コミュニティ形成・連結」は、イベント参加者数に勢いを感じる。Osaka Hackers Clubは、会員数がもう少し多くなっていいと思うが順調に増えている。会員の能力、興味などを分類しピンポイントなネットワーキングの機会を戦略的に作ってはどうか。BをつけているがAでもいい。「プロジェクト創出」は、もう少し結果が出ていいと思う。関西の経済団体がOIHをサポートするような環境がプロジェクトを推進する上で肝要。また、モチベーションをはっきり持っている大企業をこちらから選んでアプローチをするべき。評価はBでよい。「情報発信」、「プロジェクトのショーケース」の評価はAで妥当。 ・「プロジェクト創出」については、どういうものを創出するのかということを含めて少し見直した方がいい。自己評価の中で自ら課題として認識している点は、適切・的確であり評価はこれで良い。自治体同士の連携、地域を越えてハッカソンやピッチを開催したり、各地の中核的研究拠点である大学も地域を超えて何かやっていくよう、自治体が仲介してもいいのではないかと。また、オープンイノベーションを模索している大企業が多い中で、自社の担当者の人材育成の場としてや、いい人材がいれば人材発掘の場にもなるという意味でOIHを活用することによって自社にメリットがあるというようにデザインしていくことが重要。 ・英語でのプログラムや英語の告知は意義がある。東京でもなかなかできておらず大阪市の努力は、これからも続けて欲しい。いろいろな大学がスーパーグローバルと言って英語で教育しようと予算をもらっているが、コンテンツが課題なので、大阪市とつないで何かをやるというのは大学も歓迎するだろう。 ・大企業のオープンイノベーションのムーブメントをうまく取り込み連携ができるかが来年度の大きな課題。大企業との連携は、今年度はアイデアを求めるものが多かったようだが、大企業側が自ら保有する特許やシーズを開示して何かをするなど、いろいろなやり方があると思う。大企業が今何に困っているかとか、こういう機能があれば大企業は喜ぶであろうとか、そういうことをこちらでプランニングして解決策を出していくような形で、OIHを活用してもらうのも大切。 			